

研究論文

縄文・弥生移行期における深鉢形・甕形土器の口径変化について

西山 集

要 旨

韓半島から、稻作農耕をはじめとする様々な情報が伝わり、稻作農耕を基盤とする弥生文化が成立した。それまでの狩猟採集、漁労、または小規模な栽培による生業から生活が一変し、食生活は転換した。その食文化の変化は煮沸用土器の形態や大きさに如実に反映され、縄文時代から弥生時代にかけて小型化してきたといわれている。そこで西日本の縄文・弥生移行期においての煮沸用土器である深鉢形・甕形土器を対象に口径分析をおこなった。8 時期 6 地域における分析の結果、北九州・南九州・山陰地域において大型土器の減少傾向がⅤ期段階でみられた。続くⅥ期では瀬戸内地域が大型土器の減少し、近畿両地域では遠賀川式土器が成立するⅦ期ではじめて大型土器の減少がみられた。煮沸用土器の機能面から、稻作農耕の受容過程はこれまでの土器の様式構造や種実圧痕の存在と若干の地域差・時期差を示すことがわかった。また、北九州地域においては大型土器の減少と小型土器の規格化が地域全体でほぼ同時期におこなわれた、つまりは稻作農耕文化の受容が北九州地域では一律であった可能性を指摘できた。

キーワード：縄文・弥生移行期、稻作農耕、土器の大きさ、口径、韓半島

はじめに

従来、狩猟採集や漁労を生業とする縄文時代から、韓半島よりもたらされた水稻農耕文化を受容したこと、日本列島は水稻農耕を基盤とする弥生時代が成立したとされる。本稿では、西日本の縄文・弥生移行期における煮沸用土器、いわゆる深鉢・甕形土器を対象に口径分析をおこない、移行期において稻作農耕文化の受容がもたらした小型化及び規格化がどのように西日本全体で進行し、水稻農耕を受容していったのかをあきらかにする。

1. 縄文・弥生移行期における土器の容量・大きさの変化にかかる先行研究

調理具としての煮沸用土器の容量に注目し、縄文・弥生移行期における食文化の変容について分析したのは小林正史である。ススやコゲといった使用痕と、くびれ度などの土器の形態差異、そして容量から総合して調理方法の違いを指摘し、縄文時代と弥生時代では土器の使い分けと作り分けがなされていたこと、また弥生時代には容量分布は 10 ℥ を境にして大型土器と中・小型土器に作り分けがなされていると指摘した。また、佐藤由紀男は、縄文・弥生移行期における伊勢湾周辺以西の西日本の甕・深鉢型土器の容量変化を縄文晚期から弥生前期に通じた分析を行った（佐藤 1998）。そして突帯文期と縄文晚期の容量組成におい

て大きな差異を指摘し、そこから食生活の変化を指摘した。また、縄文・弥生移行期において煮炊き用土器の容量組成を比較し、土器は「弥生化」するにつれて 10 ℥ を超える大型土器が減少する傾向を明示した。この 10 ℥ を境に大型土器ととらえている。

一方、濱田充延は遠賀川式土器の様式構造をあきらかにすることを目的として、北部九州・中部瀬戸内・畿内の 3 地域を対象に各地域の凸帯文深鉢と遠賀川甕の口径と器高の比率から分析をおこなった（濱田 1999）。北九州の凸帯文土器は遠賀川式に比べてⅢ群特に 30 cm 以上のものが多い点、近畿と中部瀬戸内では遠賀川式における中型、大型品に相当するサイズの土器が一定量存在すると指摘している。

また、中村大介が縄文・弥生移行期の中九州において土器の使用痕と容量に注目し、煮沸具の様相を通して圧痕で見つかっているイネや雑穀の食べられ方、扱われ方を推定している（中村 2007）。中村は容量を分析した結果、それまでの先行研究で小林や佐藤らが言及している「10 ℥」という容量に注目し、稻作の受容によりコメ調理を行うようになった過程で 10 ℥ 以下の甕、特に 5~10 ℥ 程度の甕が炊飯用として特化してきた可能性を検討している。

宮地聰一郎は、韓半島の無文土器と石崎曲り田遺跡出土の甕の口径の比較をおこなっている（宮地 2009）。曲り田遺跡における縄文土器と無文系土器にはどちら

も35cm以上のものは激減しているが、縄文土器に比べて無文土器は小形土器が多く、特に25cmにまとまりをみせるといった規格性があることから、曲り田遺跡の無文系土器は韓半島の無文土器や遠賀川式土器に共通した土器製作システムを用いていたと指摘した。また、龍岩里遺跡や休岩里遺跡の無文土器と比較して曲り田遺跡の無文系土器はサイズが大きい点を指摘する（宮地2022）。無文系土器が出現する直前の江辺4地点SX1段階ではなお口径35cm以上の大型土器が多く、かつ様々なサイズの土器組成を示すことも言及した。刻目突帯文Ⅰ期では内径35cm以上の大型土器が多くかった点に対し、刻目突帯文Ⅱa期の山ノ寺・夜臼Ⅰ期では大型土器が激減し、続くⅡb期の福重稻木遺跡では20cmに集中する点を指摘し、煮沸物や使用状況の変化によるものと考えた（宮地2022）。

2. 目的と方法

食文化の変化または土器の製作システムの転換による縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土器の容量及び大きさの変化について、これまでの先行研究において指摘されてきた。本稿では、研究目的として土器の大きさ特に口径の変化を西日本の小地域区分ごとに測定し、各時期の口径分布からどのように水稻耕作による食文化の変化および土器製作システムが変遷していくのかをあきらかにする。

研究方法として、主に縄文・弥生移行期における三重県を含む近畿以西の西日本地域の深鉢・甕といった煮沸用土器を対象に、土器の口径を測定し、分析をおこなう。

本来ならば土器の容量に焦点をあて、西日本全体における機能からみた稻作農耕文化の受容による「弥生化」の様相を詳らかに追求すべきであるが、容量のみでは測定できる資料が限られており、また大型の土器ほど復元しにくくデータに反映されなくなってしまい、分析対象が制限されてしまう。また、大きい土器になるほど完形に近い形で残存する可能性が低いため、変化の過程を明らかにする本稿において分析上のノイズがかかる可能性がある。よって本稿では完形に復元できずとも口径が算出できる破片資料も対象にし、口径から小形土器が増加していく様相を明らかにする。

しかしながら、口径という数値を分析対象にもちいる際に、土器型式や個体差によって胴部最大径が口径を上回る場合や、口縁端部が内にすぼまつたり内傾したりする場合も多いため、口径と容量の相対的大小の誤差が生じてしまうことは否めない。そこで、器形な

どの影響でどれだけ誤差が生じてしまうのかを同じ口径の対象時期・地域の土器をランダムに抽出し、20cmと22cmの口径の土器で検証した【図1】。外れ値はあるものの、概ね前後1~3ℓ以内の容量分布にグループがおさまっていることがわかる。また、30cm以上のものは完形に復元して容量測定の対象にできる資料が少ないため、口径での分析は傾向をとらえる上では有効と考える。

口径の測定に関しては、土器の内容物の変化から縄文・弥生移行期における稻作農耕文化への転換の様相をあきらかにするという観点から、容量と同じく口縁端部の内面から測定しているため、器厚は含めない。測定箇所は【図2】の口径測定図のとおりである。

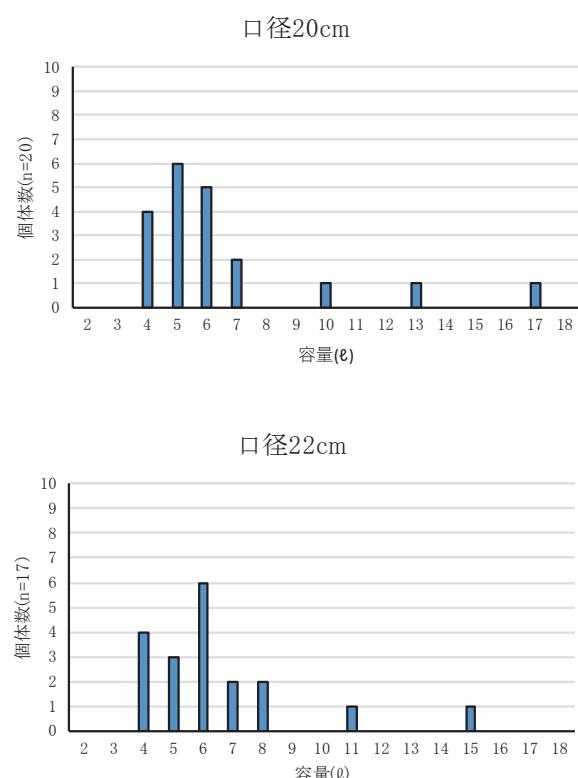


図1 同口径の土器容量の誤差

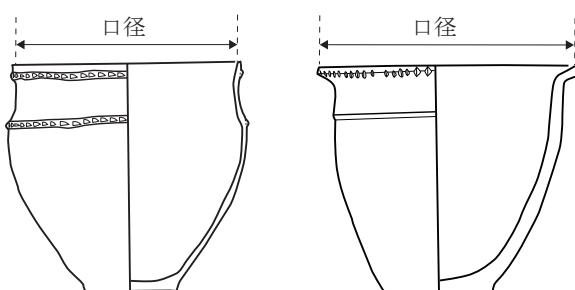


図2 口径測定図

表1 西日本併行関係編年表

	九州	四国	瀬戸内	山陰	近畿	時期区分
後期末	御領		岩田第三類		宮滝II	I
	広田/天城				滋賀里I	IIa
晩期前葉	古閑（古）		岩田第四類		滋賀里II	IIb
	古閑（新）		川棚条里		滋賀里IIIa	IIc
晩期中葉	黒川（古）		舟津原	原田（古）	篠原（古）	IIIa
	黒川（中）			原田（中）	篠原（中）	IIIb
	黒川（新）		谷尻	原田（新）	篠原（新）	IIIc
弥生早期/晩期後葉	江辺SX1	様相I	前池	桂見I	凸帯文1期	IV
	山ノ寺/夜臼I	様相II	津島岡大	桂見II	凸帯文2a期	V
	夜臼IIa		沢田	古市河原田	凸帯文2b期	VI
弥生前期	夜臼IIb+板付I	様相III・IV/ I-1	I-1~4	古海/ I~1	凸帯文3期	VII
	板付II	I-2~4		I-2~4	I-1~4	VIII

3. 分析の視点

口径分布は縄文から弥生にかけて、容量組成のよう¹に 10 ℥ といった先行研究で言及された指標はこれまであまり述べられていない。濱田が遠賀川式土器を口径と器高から口径 5~8 cm の I 群、口径 10~20 cm の II 群、30~40、50~60 cm の III 群に分類し、北九州の凸帯文土器は遠賀川式に特に III 群の 30 cm 以上のものが多く、近畿と中部瀬戸内では遠賀川式における中型、大型品に相当するサイズの土器が一定量存在するといった指摘や（濱田 1999）、宮地氏が韓半島の無文土器と石崎曲り田遺跡出土の甕の口径を比較し、双方で口径 35 cm 以上の土器が激減している点、無文土器はより小形で、特に 25 cm 前後に口径が規格化されるといった指摘をしている。容量における分析での 10 ℥ 以上を大型品とする指標が、口径においては 30 cm（濱田 1999）または 35 cm（宮地 2009, 2021）以上のものが相当するようである。

しかし容量のように縄文・弥生移行期にかけての明確な容量組成モデルは不十分であるため、10 ℥ といった指標は用いずにグラフ上に表れるまとまりを基に小型、中型、大型と考えられるグループが読み取れる範囲で、各段階でのグループを設定し、縄文・弥生移行期の西日本の各地域においてどのように変化していくのかをあきらかにする。

4. 対象時期と地域

三重県を含む近畿以西の西日本全域を対象とする【表2】。小型化の普及の過程を明らかにするため、地域細分した上で分析をおこなう。

対象地域は北九州地域（福岡県・佐賀県）、南九州地域（熊本県・鹿児島県・宮崎県・大分県）、山陰地域（鳥取県・島根県）、瀬戸内地域（山口県・岡山県・

愛媛県・香川県・徳島県）、西近畿地域（大阪湾を囲む兵庫県・大阪府・和歌山県）、東近畿地域（京都府・奈良県・滋賀県）である。

また、対象時期は縄文時代後期末から弥生時代前期までとする【表1】。本論では西日本全域を通じて、稻作農耕文化が受容された影響による小型土器の増加と大型土器の減少の過程を明らかにし、そこから稻作農耕文化の実像にせまることが目的である。よって、縄文時代後期末から弥生時代前期までの縄文・弥生移行期を 8 期 12 細分し分析をおこなう。

5. 西日本における縄文・弥生移行期の口径変化

西日本における深鉢形土器、甕形土器の口径変化を分析する。なお、西近畿地域VII期と遠賀川式土器については濱田氏のデータを一部引用した（濱田 2003）。西日本全体の口径分布を各地域・時期ごとにまずは概観する。

〈I期〉

山陰地域は資料数が少ないので様相が判然としない。北九州地方では 23 cm のものがもっとも多いが、12 cm から 41 cm まで全体の傾向として同じような分布をたどる。南九州地域では 28 cm 前後がもっと多く、続いて 22 cm が多い。22~32 cm でひとつのグループ形成が確認できる。瀬戸内地域ではまばらである。西近畿地域ではピークが 32 cm、東近畿地域では 26 cm に確認できるが、10 cm の小型のものから 40 cm 以上の超大型のものまで幅広く分布し、グループが形成されているとは言い難い。

〈II期〉

北九州地域では 17 cm 以下と 20~31 cm、32 cm 以上の 3 つのグループが確認できる。ピークは 26 cm で

表2 分析対象遺跡一覧

地域	遺跡名	市町村	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	VII期	VIII期	IX期
北九州	広田	福岡県糸島郡二丈町	39	57					2	3	
	貴川	福岡県北九州市		26	15						
	長行	福岡県北九州市			18						
	力キ	福岡県北九州市			10	4	2	4	1		
	春日台	福岡県北九州市			8	7					
	上德力	福岡県北九州市			6						
	貴・井手ヶ本	福岡県北九州市			8						
	石田	福岡県北九州市				4	12	11			
	久泉	福岡県福岡市		13							
	江辻第4地点	福岡県福岡市			73						
	板付	福岡県福岡市				19	9	27	40		
	那珂	福岡県福岡市				7	5	2			
	十郎川	福岡県福岡市			29		15				
	曲り田	福岡県福岡市			11						
	雀居	福岡県福岡市				24		23	26		
	宇木汲田貝塚	福岡県福岡市					4	19			
	夜臼	福岡県福岡市							2		
	野多目	福岡県福岡市					21	12			
	菜畠	佐賀県唐津市		2		85	78	180	64		
	柏崎貝塚	佐賀県唐津市						4	21		
	久米高畑	愛媛県松山市			2						
	ワクト石	熊本県熊本市	5	6	1						
	鳥井原	熊本県熊本市									
	上南部A	熊本県熊本市			3						
	下江津湖	熊本県熊本市				11	14	1			
	古閑	熊本県上益城郡益城町	56								
	上の原	熊本県下益城郡城南町					9				
	斎藤山	熊本県玉名市					19	10			
	坂口	大分県玖珠郡玖珠町		24				1			
	黒土	宮崎県都城市	1	1			6	4	4		
	古城	宮崎県西臼杵郡高千穂町				3	3				
	布平	宮崎県西臼杵郡日之影町		7	3		1	2			
	上水流	鹿児島県霧島市	5	3	78		5		17	1	
	天城	鹿児島県大島郡伊仙町	1	63							
	上加世田	鹿児島県南さつま市				2	2				
	高橋貝塚	鹿児島県南さつま市						10			
	桙木原1	鹿児島県鹿屋市			22						
	計志加里	鹿児島県川内市		5							
	千河原	鹿児島県加世田市		3							
	上中段	鹿児島県曾於郡末吉町				8	13				
	山ノ寺梶木	長崎県南高来郡深江町			105						
南九州	ヨレ	島根県益田市	3	4							
	小丸	島根県飯石郡飯石原町	2		1	1	1	1	21		
	板屋Ⅲ	島根県飯石郡飯南町		58							
	柱見	鳥取県鳥取市	1	1	4	36	3	1			
	神原	島根県雲南市		9							
	タテチヨウⅢ	島根県松江市		11	14	13	12	30			
	原田1	島根県宍道市	26	4	7	9	2				
	古屋敷	島根県大田市		27	27	9	18	6			
	妻木法大神	島根県西伯郡大山町		2	3		1	37	52		
	青木	島根県米子市				1					
	霞遺跡群	島根県日野郡日南町				5	4	5	7		
	島根大学構内遺跡	島根県松江市					1	1			
	上曾荒神原	島根県日野郡日野町					8	2			
	坂長	島根県西伯郡伯耆町				8	8	1			
	智頭枕田	島根県智頭郡智頭町					1	26			
	イキス	島根県倉吉市					8				
	講武地区	島根県松江市					2	1			
	高福大将軍	島根県八頭郡河原町					2				
	名和飛田	島根県西伯郡名和町					3				
	別所中峯	島根県東伯郡赤崎町					1				
	本高弓ノ木	島根県鳥取市					1				
	本高円ノ前	島根県鳥取市					1				
	イセ	島根県益田市							3		
西近畿	上里	京都府京都市			28	32					
	北白川追分町	京都府京都市				1		3	3	7	
	一乗寺向畠町	京都府京都市								1	
	寺界道	京都府京都市						5	5	4	
	佐山尼塙外	京都府久世郡久御山町						34			
	下越野南	京都府久世郡大山崎町								1	
	西坊城	奈良県御所市						35			
	三輪之松本	奈良県桜井市							4	4	6
	脇本	奈良県桜井市							1	1	
	中町西	奈良県奈良市							5	5	
	和爾・森本	奈良県天理市								2	
	穴太	滋賀県大津市				5	16	6	6		
	滋賀里	滋賀県大津市						21			
	小津浜	滋賀県守山市						2	2	9	
	柴原南	滋賀県東近江市								2	
	後川	滋賀県近江八幡市								4	
	掛穂	滋賀県能登川町						2	4	4	
	上出A	滋賀県蒲生郡安土町							13		
	天白	三重県松坂市				41	3				
東近畿	上	京都府京都市			28	32					
	北	京都府京都市				1		3	3	7	
	一乗寺向畠町	京都府京都市								1	
	寺界道	京都府京都市						5	5	4	
	佐山尼塙外	京都府久世郡久御山町						34			
	下越野南	京都府久世郡大山崎町								1	
	西坊城	奈良県御所市						35			
	三輪之松本	奈良県桜井市							4	4	6
	脇本	奈良県桜井市							1	1	
	中町西	奈良県奈良市							5	5	
	和爾・森本	奈良県天理市								2	
	穴太	滋賀県大津市				5	16	6	6		
	滋賀里	滋賀県大津市						21			
	小津浜	滋賀県守山市						2	2	9	
	柴原南	滋賀県東近江市								2	
	後川	滋賀県近江八幡市								4	
	掛穂	滋賀県能登川町						2	4	4	
	上出A	滋賀県蒲生郡安土町							13		
	天白	三重県松坂市			41	3					

一期
二期
三期
IV期
V期
VI期
VII期
VIII期

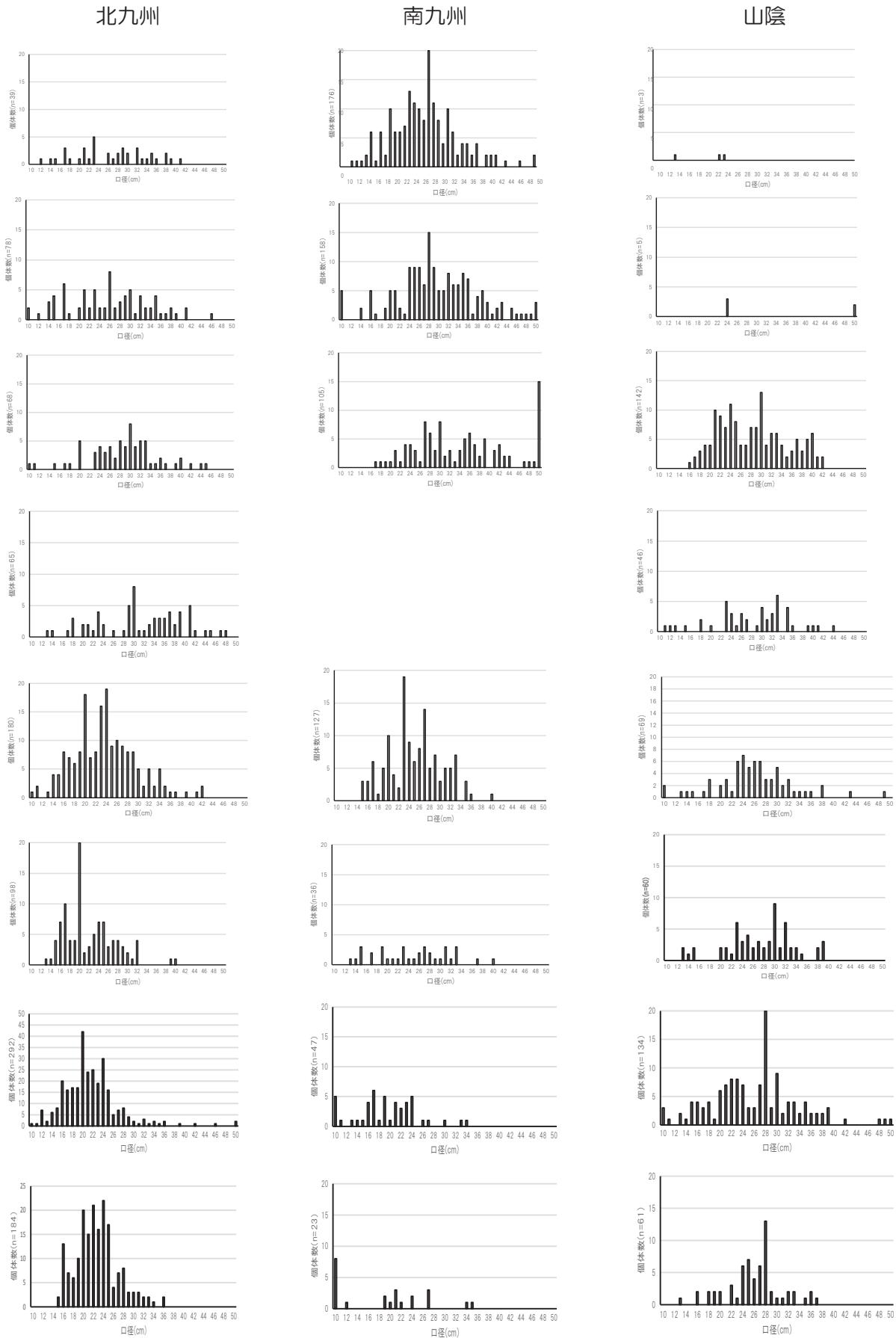


図3 西日本における口径分布（北九州・南九州・山陰地域）

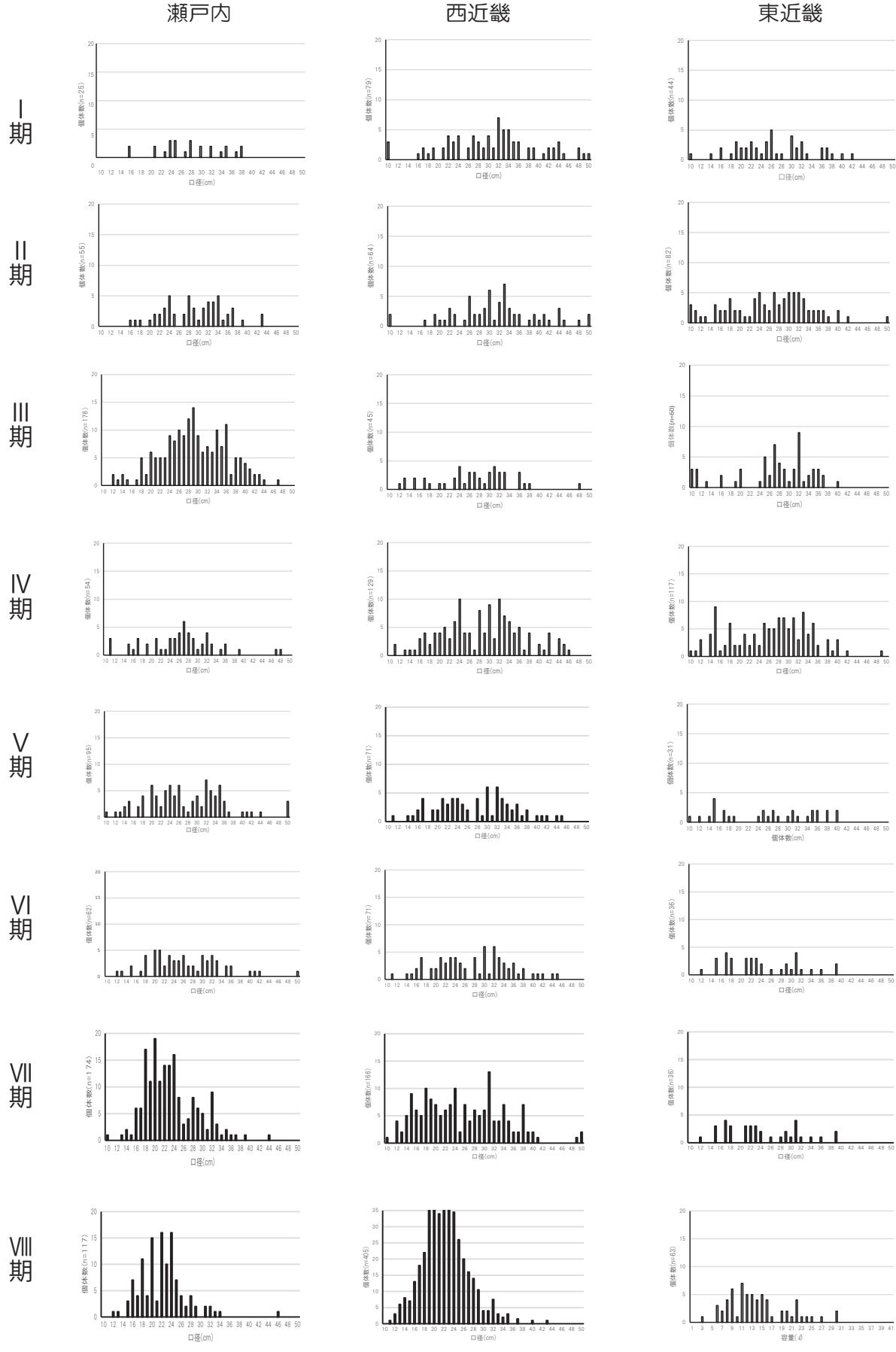


図4 西日本における口径分布（瀬戸内・西近畿・東近畿地域）

ある。南九州地域は 28 cm がもっとも多く、それをピークに 24~35 cm に大きなひとつのまとまりをみせている。山陰では判然としない。瀬戸内地域では 26 cm 以上と以下で大型・小型に分化している。西近畿地域はピークが 33 cm あり、24 cm、37 cm をそれぞれ境として 3 分化している。東近畿地域では全体的に一定の分布を示しているが、23~33 cm に大きなまとまりがみられる。

〈Ⅲ期〉

北九州地域では 23~33 cm にもっとも大きなまとまりがあり、それ以下と以上のもので 3 分化した様相が若干みられる。南九州地域では 50 cm 以上の口径がもっとも多い。Ⅲ期の南九州地域では特に口縁部が広がった大型の黒川式土器が上水流遺跡や宮崎県楓木原 I 遺跡などで多く出土しており、その影響と考えられる。山陰地方では 26 cm、35 cm 周辺を境界に 3 つのグループが形成されている。29 cm がもっと多く、次いで 24 cm が多い。瀬戸内地方で 29 cm をピークに 24~30 cm の大きなまとまりを形成する。西近畿地域では若干の 3 分化がみられるが、グループとしてのまとまりは曖昧で、一定の口径分布を示しているといえる。東近畿地域では 32 cm をピークに 25~32 cm に中~大型と思われるグループが形成されており、それ以下とそれ以上で 3 分化している。

〈Ⅳ期〉

北九州地域では 25 cm と 40 cm を境に 3 分化した口径分布が認められる。ピークは 30 cm にある。山陰地域では 33 cm がもっとも多い。23~36 cm にひとつの大きなグループを形成している。小形、大形のグループはそれらのまとまりに比べて量が少ない。瀬戸内地域では 27 cm をピークに 21~36 cm にまとまりがみられ、11~19 cm、39~48 cm の小形、大形グループが形成されている。しかし中形グループに比べて小形、大形グループは量が少なく、口径分布の様相は山陰地域と類似している。西近畿地域では 24~36 cm の中形グループが全体に対してもっとも多い。26 cm、39 cm を境に 3 つのグループを形成しているといえる。東近畿地域は 15 cm 前後のものがもっとも多いが、全体として 25~35 cm の中~大型グループが形成される。加えて 40 cm 以上のグループ形成から 3 分化していると考えられる。

〈Ⅴ期〉

北九州地域では 24 cm、20 cm のものが突出して多い。前段階では 30 cm 以上のものが全体の 50% 近くを占めていたが、Ⅴ期の段階では 20% ほどに減少している。

また、資料数の増加にもよろうが、全体の口径における規格が 14~30 cm の幅で 20~24 cm をピークに大きなまとまりをみせている。南九州地域でもその傾向は同様で、23 cm のピークを境に大きなグループを形成しつつある。山陰地域では 24 cm をピークになだらかな山を形成している。九州の両地域と同様、30 cm 以上のものは減少し、20~29 cm の幅で大きなグループを形成している。瀬戸内地域では九州や山陰で認められた全体の大きなグループ形成はみられず、27, 28 cm 周辺を境に分化しており、32 cm がもっとも多いピークとなっている。30 cm 以上のものも半数近くを占める。西近畿地域では瀬戸内地域と類似した分布を示しており、ピークは 30~32 cm にある。27 cm を境に大型・小型に 2 分化しているとも読み取れる。もっとも多い口径分布は 30 cm と 32 cm であり、西近畿以西の地域に比べてやや大きい土器が多い。東近畿地域は資料数が少ないため傾向は読み取れないが 15 cm の口径分布がもっとも多い。

〈Ⅵ期〉

北九州地域では 20 cm がもっとも多い。21~23 cm はそれほど多くはないが、ここを分化しているとは捉えがたい。20 cm 前後の口径が顕著に増加している上に特化した作り分けがされていた可能性が高い。南九州地域では資料数が少ないため北九州地域と同様の傾向は捉えられない。山陰地域では 30 cm の口径がもっとも多い。瀬戸内地方では 20, 21 cm の口径がもっと多いが、30~34 cm も一定量存在している。山陰、瀬戸内地域では北九州地域に比べて 20 cm 前後に特化した土器の作り分けがこの段階ではされていなかったことがうかがえる。四国地域は資料数が少ないため判然としないが、30 cm の口径の分布がもっと多いため、山陰地方や瀬戸内地域と同様の口径分布をしていた可能性がある。西近畿地域はⅤ期とⅥ期の時期差が確実な資料が乏しく、一括して同資料を扱っているためⅤ期と同様のグラフとなっている。東近畿地域においても一部を除き、Ⅴ期と同一資料を扱っている。資料数が少なく判然としないが 30 cm 以上のものが一定数存在し、全体のグループ形成もみられないままである。

〈Ⅶ期〉

北九州地域では 20 cm がもっと多く、16~25 cm に小型グループを大きく形成している。中型、大型グループの分化は認められず、26 cm 以上の中型、大型の土器は減少している。30 cm 以上のものはⅤ期と比べて更に激減する。Ⅵ期に認められた口径が 20 cm 前後の小形土器に特化した作り分けが顕著である。南九

州地方は北九州地域と同様の 10~24 cm の小型グループが主体となっている。一方、山陰地方では 28 cm の口径をもつ土器がもっとも多く、その上増加が顕著である。また、30 cm 以上のものも割合は低いが一定数存在する。瀬戸内地方では九州地方と同様に 20 cm 前後がピークでもっとも多く、それを主体に大きなひとつのグループを形成しており九州地域と類似した口径分布をみせている。ただし、北九州地域と比べて 30 cm 以上の大型の土器も多く存在する。一方、西近畿地域では口径が 20 cm 前後の小型土器は増加しつつも、小型グループのみが大きく形成されることではなく 25 cm を境に 25 cm 以上、特に 30 cm 前後の土器が 40% 近くを占め、全体のグループ形成は 2 分化したままである。東近畿地域では資料数が少ないため判然としないが、おそらく西近畿地域と同様の傾向を示すのではないかと推察される。

〈VII期〉

弥生時代前期には西日本全体で 19~28 cm をピークに大きな小型グループのまとまりのある非常に高い規格性をもった口径分布の傾向を示す。北九州地域では 20~24 cm、山陰地域では 28 cm、瀬戸内地域では 22~24 cm、西近畿地域では 19~24 cm を各々ピークとした口径分布になっている。山陰地域を除いて 19~24 cm の口径を指標として小型の土器製作を行っていたと考えられる。

6. 稲作農耕の受容による深鉢形・甕形土器の小型化について

前項で口径分析をおこない、V 期の段階で北九州・南九州・山陰地域において従来指摘されてきた 30 cm 以上の大型土器の割合にあきらかな減少傾向が確認できた。また VI 期になると、北九州では凸帯文単純期の水田跡などの本格的な稻作農耕の痕跡が確認できる段階で、土器の口径分布においても 30 cm 以上の大型土器は顕著な減少を示し、口径が 20 cm の小型土器の主体的な製作・使用が併せておこなわれていることがわかった。この傾向は宮地氏が玄界灘沿岸の遺跡を対象に分析した刻目突帯文 I 期（本稿 IV 期）で 35 cm 以上の大型土器も多かった状況が、刻目突帯文 II a 期（本稿 V 期）では大型土器が大幅に減少し、続く刻目突帯文 II b 期（本稿 VI 期）では 20 cm 前後に集中する個別の遺跡における傾向と概ね一致する。北九州地域では個別の遺跡間での稻作農耕の受容の差異はあったであろうものの、地域全体として稻作農耕の影響とともに食文化の転換も同時におこなわれていたであろうこと

が推察できる。

また、V 期における大型土器の減少は南九州地域と山陰地域にも認められる。南九州地域は IV 期の資料を分析できていないためその前段階の III 期との比較になるが、その点を考慮してもなお大型土器の減少は首肯できる。山陰地域は大型土器の減少と確実に主張できる数値ではないものの、大型土器の指標を 30 cm とした場合、IV 期よりもその割合は減少しており、23~27 cm の口径分布にまとまりを確認できる。特に山陰地域は韓半島とのかかわりが縄文時代晚期前葉から注視され（岡田・千 2006）、後葉になると再び希薄になる点が指摘されてはいるが、島根県板屋 III 遺跡の前池式土器から最古のイネの穀圧痕が確認されている。続く VI 期の段階で、北九州地域もしくは韓半島からの影響があった可能性も指摘できる。しかし、北九州地域のような水田遺構や大陸系磨研石器などの文化変容をともなう遺構や遺物はこの段階では確認されておらず、イネ科穀物そのもの情報と栽培を試行する段階である（濱田 2023）。濱田はこの段階の情報源は韓半島にある可能性を指摘しており、筆者も同様の立場をとりたい。ただし、大型土器の減少と 20 cm 前後の小型土器の規格化の前兆については、果たして試行的栽培が食文化に対しそこまでの影響をきたすものなのか、慎重になる必要があるだろう。

また、大型土器の減少については瀬戸内地域では VI 期から認めることができ、比べて山陰地域が一段階早い変化を示すことも重要である。

西近畿および東近畿地域では VII 期になんでも大型土器の減少傾向はみられず、遠賀川式土器が成立する VIII 期ではじめて減少する。これは近畿地域において、稻作農耕の波及が玉突きまたはリレー式に及んだことによる物理的距離の差であると考えられる。VII 期の末には大阪府護良郡条里遺跡や水走遺跡では弥生土器と凸帯文土器が共伴しているが、大きさという点からはまだ縄文的要素が残ることを示唆する。

おわりに

土器の大きさ、つまりは容量や規格を分析していく上で、口径分布はあくまで資料数の補完的立場に立った分析としておこなった。しかし、西日本全体における縄文・弥生移行期の深鉢形・甕形土器の口径の変化はこれまでの容量やサイズが小型化する現象（佐藤 1999, 濱田 2000, 小林, 中村 2007, 宮地 2007, 2022）を追認するものとなった。また、これまで北九州、瀬戸内、近畿での枠組み、また凸帯文期、遠賀川期等の相

対的な比較を8時期に細分することで、どのように小型土器の増加及び大型土器の減少がなされていったのかを段階的に追うことができた。縄文・弥生移行期における稻作農耕の伝播と受容という大きな画期について、土器の口径から検討をおこない、西日本全体における稻作農耕の波及過程に対する新たな情報を提示してきた。

しかしながら、対象遺跡や資料の取りこぼしや、資料一個体に対する型式学的な時期判断による分析も多く、稻作農耕文化の広がりを把握する上での時期の併行関係については、今後の課題としたい。

最後に矢野健一先生、この度はご退官、誠におめでとうございます。先生と大学1回生の4月の研究入門で出会うことがなければ、まぎれもなく今の私はここにいませんし、考古学も続けていなかったと思います。今後とも健康にお気をつけて、たまにおいしいお酒を飲み、遺跡にドライブに連れて行ってくださると嬉しいです。今後もご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

参考文献

- 泉拓良 1990 「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』8 奈良大学文学部文化財学科 p.55-79
- 泉拓良・山崎純男 1981 「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』 p.347-352
- 岡田憲一 2014 「瀬戸内海東辺における凸帯文土器と遠賀川式土器」『第25回中四国縄文研究会 発表資料集 中四国地方における縄文時代晚期後葉の歴史像』中四国縄文研究会 p.149-164
- 岡田憲一・千羨幸 2009 「二重口縁土器と口列文土器」『古文化談叢』九州古文化研究会 p.1-46S
- 蒲原宏之 2013 「西日本における弥生土器諸様式の併行関係」『柳田康雄古稀記念論文集 弥生時代政治社会構造論』雄山閣 p.85-100
- 黒岩隆 1987 「縄文土器の大きさ—深鉢形土器の容量を中心にして—」『東京考古』5 東京考古談話会 p.49-67
- 黒岩隆 1998 「縄文土器の大きさ (2) —深鉢形土器の容量とそのタイプ—」『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会 p.1-14
- 小林正史 1991 「土器の器形と炭化物からみた先史時代の調理方法」『北陸古代土器研究』創刊号 北陸古代土器研究会 p.15-29
- 小林正史 1992 「煮沸実験に基づく先史時代の調理方

- 法の研究」『北陸古代土器研究』第2号北陸古代土器研究会 p.81-100
- 小林正史 1991 「土器の器形と炭化物からみた先史時代の調理方法」『北陸古代土器研究』創刊号 北陸古代土器研究会 p.15-29
- 小林正史 2017 「一、鍋の形・作りの変化」『モノと技術の古代史 陶芸編』p.1-55 吉川弘文館
- 小南裕一・藤本有紀 2006 「川棚条里遺跡出土の縄文後・晩期土器」『山口考古』第26号山口考古学会
- 小南裕一 2009 「縄文後・晩期土器と板付I式土器」『弥生時代の考古学2 弥生文化誕生』同成社
- 佐藤由紀男 1999 『縄文弥生移行期の土器と石器』雄山閣出版
- 佐原真「日本考古学会例会講演要旨 土器の用途」『考古学雑誌』第64巻 第4号 p.119
- 佐原真 1975 「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座 日本歴史1 原始および古代1』岩波書店 p.114-182
- 設楽博己 2007 「弥生文化研究の深化と新展開」『季刊考古学』第138号 p.14-17
- 庄田慎矢 2017 「農耕の定着化と土器の器種組成の変化」『季刊考古学』第138号 p.47-50
- 杉原莊介 1977 「日本農耕社会の形成」吉川弘文館
- 千羨幸 2008 「西日本の孔列土器」『日本考古学』第25号 日本考古学協会 p.1-21
- 田中良之「縄文土器と弥生土器」『弥生文化の研究』3 p.115-125 雄山閣
- 中島直幸 1982 「初期稻作期の凸帯文土器」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』p.297-354
- 中沢道彦 2017 「日本列島における農耕の伝播と定着」『季刊考古学』第138号雄山閣 p.26-29
- 中沢道彦 2009 「縄文農耕論をめぐって—栽培種植物種子の検証を中心に」『弥生時代の考古学』5 同成社
- 中沢道彦 2014 「先史時代の初期農耕を考える—レプリカ法の実践から—」日本海学研究業所
- 中村大介 2007 「縄文時代から弥生時代開始期における調理方法」『土器研究の新視点—縄文から弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理—』大手前大学史学研究所 p.11-42
- 中村大介 2012 「弥生文化形成と東アジア社会」搞書房
- 中村豊 2008 「西日本磨研土器(滋賀里I~III)」『縄文土器総覧』アム・プロモーション p.782-789
- 中村豊 2008 「四国地方の様相」『古代文化第60巻』第3号 p.107-117
- 中村健二 2008 「凸帯文系土器(中四国・近畿・東海

- 地方)」『縄文土器総覧』アム・プロモーション p.p-798-805
- 中村健二 2008 「近畿地方の様相」『古代文化』第 60 卷 第 3 号古代文化協会 p.p107-117
- 端野晋平 2009 「無文土器からの影響—松菊里文化と弥生文化の形成—」『古代文化』第 61 卷 第 2 号古代学協会 p.p83-93
- 濱田竜彦 2008 「中国地方東部の凸帯文土器と地域性」『古代文化』古代文化協会 p.p422-437
- 濱田竜彦 2023 「山陰地方—縄文時代晚期における稻作の試行と大陸・九州との関係—」『季刊考古学別冊 40』
- 濱田延充 1989 「遠賀川式土器の様式構造」『突帯文と遠賀川』土器持寄研究会 p.p1005-1026
- 春成秀爾 「弥生時代はいかにしてはじまったか」『考古学研究』20-1 p.p5-24
- 深澤芳樹・庄田慎矢 「②先松菊里・松菊里式土器と夜臼・板付式土器」『弥生時代の考古学』2 p.p171-187
- 藤尾慎一郎 1991 「水稻農耕と突帯文土器」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ 日本における初期弥生文化の成立』横山浩一退官記念事業会 p.p187-268
- 藤尾慎一郎 2017 「弥生文化範囲論の射程」『季刊考古学』第 138 号雄山閣 p.p-51-54
- 藤口健二 「朝鮮無文土器と弥生土器」『弥生文化の研究Ⅰ』3 雄山閣 p.p147-162
- 藤村東男 1981 「土器容量の測定—晚期縄文式土器を例として—」『考古学研究』考古学研究会 p.p106-117
- 三阪一徳 2014 「土器からみた弥生時代開始過程」『列島初期稻作の担い手は誰か』公益財団法人古代学協会 p.p125-174
- 宮内信雄 2008 「縄文土器の容量」『縄文土器総覧』アム・プロモーション p.p1025-1030
- 宮地聰一郎 2008 「黒色磨研土器」『縄文土器総覧』アム・プロモーション p.p790-797
- 宮地聰一郎 2008 「凸帯文系土器（九州地方）」『縄文土器総覧』アム・プロモーション p.p806-813
- 宮地聰一郎 2009 「刻目突帯文土器と無文土器系土器—異系統土器共存の実態—」『古代文化』第 61 卷第 2 号 古代学協会 p.p94-104
- 宮地聰一郎 2022 「西日本縄文時代晚期の土器型式圏と遺跡群」株式会社雄山閣
- 宮本一夫 2017 「東アジアにおける農耕の起源と拡散」『季刊考古学』第 138 号雄山閣 p.p18-21
- 森岡秀人・中園聰・設楽博己 2005 『稻作伝来』日本の先史遺跡を復元する 4 岩波書店
- 家根祥多 1981 「晚期の土器 近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣 p.p238-248
- 家根祥多 1984 「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所 p.p49-78
- 家根祥多 1994 「篠原式の提唱—神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討—」『縄紋晚期前葉—中葉の広域編年』平成 4 年度科学研究費補助（総合 A）研究成果報告書
- 山崎純男ほか 1981 「九州の土器」『縄文文化の研究 4』雄山閣 p.p249-261
- 山崎純男 1980 「弥生文化成立期における土器の編年的研究—板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合—」『鏡山猛先生古稀記念古文化論』p.p117-192
- 報告書については紙幅の関係で省略する。
- 図 1～図 4：筆著作成
- 表 1, 2：筆著作成